

二松学舎と陽明学の歴史

鈴 置 拓 也

はじめに

二松学舎大学は明治十年（一八七七）に三島中洲（一八三一～一九一九）が創設した漢学塾二松学舎に端を発している。中洲は陽明学を重視していたため、大学となった今日でも二松学舎は陽明学の精神を継承していると広く認識されている。

例えば、二松学舎創立百周年を記念して発刊された『二松学舎百年史』では、当時の理事長兼学長であった浦野匡彦（一九一〇～一九八六）が「活学の徒の養成をめざして」と題して次のように述べている。

東洋学といっても、現代に、そして将来に向って前進するためには、いたずらに復古のみを叫ばず、常に国際的視野に立脚した研究方法が必要である。幸に、本学は陽明学を道統とし、先師は王陽明の事上磨鍊・知行合一に則り、実学を説かれている。わが国陽明学の先人が、外来の仏教やキリスト教に対して取組んだ態度をもってするならば、あらゆる外来の文化に対しても、往くとして可ならざるは無しであろう。¹⁾

百周年という大きな節目を迎え、二松学舎の更なる発展を期待する言葉であるが、ここでは陽明学が二松学舎の「道統」として受け継がれてきたと発言していることに注目したい。ちなみに浦野は、引用文中にも見られる、『伝習録』内の「事上磨鍊^②」という言葉を座右の銘にしており、また百周年を記念して陽明学研究所を設置し、その初代所長に就任している。

ただ、果たして二松学舎において、「道統」と呼ぶべき一貫した陽明学の系譜が存在すると明言できるだろうか。残念ながら、現在それを裏付けるだけの証拠を用意することはできない。

他方、近代以降の陽明学に関する研究は一定の蓄積を持ち、時に二松学舎の陽明学について言及される場合もある。

確かに三島中洲は、後述するように、方谷に就いて陽明学に基づく「実学」を学んでおり、一方で道徳涵養のために陽明学を修めることが「簡易方」であると発言している^③。ただ、中洲は二松学舎における講義で陽明学を講じることは少なかった。それに加えて、現段階では、中洲の陽明学理解がその門弟達に受け継がれ現在まで教授されているともいえない。しかし、陽明学を「道統」として認識していた浦野、さらに令和四年（二〇二二）で一四五周年を迎える二松学舎においては、陽明学が現在まで如何に扱われてきたのかを整理し、その歴史の中で陽明学が如何に扱われてきたのかを再検討する必要があるだろう。陽明学に注目して二松学舎の歴史を考えることよって、これから目指すべき未来へ向けて、守っていくべき「二松学舎の伝統」とは何か、その示唆を我々に与えてくれるはずである。

そこで本稿では、二松学舎創設より現在にいたるまで、陽明学の命脈が如何に受け継がれていたのかという問題を考える前提として、二松学舎と陽明学との関係について個々の事例を取り上げて、その一四五五年の歴史を概観したい。

内容としては、まず創設者である三島中洲の陽明学に対する考えや二松学舎における講義について論じ、次いで中洲の

三男である三島復（一八九七～一九二四）の陽明学研究についても言及する。特に、中洲の師である山田方谷（一八〇五～一八七七）も陽明学を以て知られる人物であるため、その思想的継承を視野に入れつつ、二松学舎内における中洲・復と陽明学を考えたい。

次に、これまで利用されてこなかった、二松学舎大学附属図書館三島文庫所蔵「王学会記録簿」⁶を用いて、その記録期間である明治三十六年（一九〇三）九月三十日から明治四十一年（一九〇八）十月十一日までの王学会の活動、及びそれ以降二松学舎で開催されることとなった経緯などを論じ、近代日本における陽明学研究活動の一例を考える。特に、吉本讓『陽明学』廃刊後、東敬治『王学雑誌』が発刊されるまでの期間、陽明学関係の活動はあまり明らかでなかった。「王学会記録簿」はこの間の活動実態を物語る、この上ない資料である。

続いて、二松学舎で中洲に直接学んだ二人の門人を取り上げて、二松学舎出身者の陽明学に関する活動や考え方について論じる。

一人は、明治十六年（一八八三）頃に二松学舎に学び、大正十五年（一九二六）六月より二松学舎学長に就任した山田方谷の義孫山田準（一八六七～一九五二）である。彼は陽明学に関する著作をいくつも残し、鹿児島第七高等学校教授時代に鹿児島王学会を主宰していた。一方で、昭和三年（一九二八）に二松学舎が専門学校となるに際してはその校長を勤め、以後昭和十八年（一九四三）三月に退任するまで二松学舎の運営を支えていたように、二松学舎と陽明学との関わりを論じる上で欠かすことのできない人物である。

もう一人は、準の退任後、昭和十八年四月に二松学舎専門学校校長に就任した那智佐典（一八七三～一九六九）である。彼は明治二十三年（一八九〇）五月に二松学舎に入学し、明治三十四年（一九〇一）以降、没する昭和四十四年（一九六九）

十一月まで二松学舎の教授として運営に尽力してきた。彼の著作は少ないものの、その学問観は陽明学に基づいていた。

最後に、昭和五十三年（一九七八）四月に設置され、現在も活動を続けている陽明学研究所（現陽明学研究センター）の創設の経緯および活動内容について紹介する。同研究所は令和五年（二〇二三）四月には四五周年を迎えるため、ここで一度丁寧とその歴史を整理する必要がある。

以上、創設より現在に至るまでの二松学舎と陽明学との関わりを概観することを通して、最後に今後の研究の展望を示すこととする。これによって、近代日本の陽明学の中で、二松学舎の果たした役割を考察する手掛かりとしたい。

一 三島中洲と二松学舎における陽明学講義 附三島復について

三島中洲は文政十三年（一八三二）十二月九日備中窪屋郡中島村に生まれた。名毅、幼名貞一郎、字遠叔、中洲はその号。天保十四年（一八四三）八月備中松山に行き、山田方谷の塾に入る。次いで嘉永五年（一八五二）三月伊勢津藩に遊び斎藤拙堂（一七九七～一八六五）に師事する。安政三年（一八五六）三月津より帰郷し、翌四年（一八五七）六月六日進鴻溪が藩主の命を受け中洲に仕藩を勧めたことにより備中松山藩に仕え、三口糧をうけることとなる。その後は昌平黌に学び、有終館学頭となるほか、明治維新まで備中松山藩へ貢献した。

維新後は、明治五年（一八七二）九月司法省に出仕し、翌六年（一八七三）五月新治裁判所長となり、その後は明治八年（一八七五）四月東京裁判所、翌九年（一八七六）二月大審院民事課に転じる。明治十年六月には大審院判事を退き、十月十日二松学舎を創設する。

彼の学問上の変遷については「余の学歴」が参考になる。彼ははじめて方谷に学んだ時を第一の変遷として、そこで朱注によって四書五経などを読み「純粹なる朱子学家とな」ったという。第二の変遷は津藩に遊学して斎藤拙堂に学んだ時期であり、ここで様々な書を読み朱子学に疑いを挟むようになり「折衷学に入」った。そして第三の変遷については次のように述べている。

三十歳以後、藩職に就くに及び：俗務に就て方谷先生に質問し、又指導を受け、先生の实地運用の妙の陽明学に基づくことを悟れり、此間凡そ十年間、実学の教を受けたり。明治後朝廷に奉仕し：五十歳後二松学舎を開き、書生を教授するに方り、復た道学に復し、陽明学を主張し、旁ら訓詁を折衷して、三十年継続して、今日に及べり^⑦

中洲は安政四年備中松山藩出仕後、色々な俗務について方谷に尋ねていたところ、方谷の「実用の学」が陽明学に基づいていると気づき、それ以降、明治維新を迎えるまでの約十年間、方谷より「実学」の教えを受けた。

そして、明治十年十月二松学舎を開いて漢学を教授するにあたっては、「道学に復し、陽明学を主張し、かたわら訓詁を折衷して」というように、陽明学を主張しつつ訓詁にも力を入れて学生を教育してきたという。

二松学舎創設時に中洲が草した「漢学大意」冒頭には、「漢学ノ目的タル、己ヲ修メ人ヲ治メ、一世有用ノ人物トナルニ在テ^⑧」とあって、「有用」の人物となることが目指されたことが分かる。すなわち中洲は、儒教をはじめとする「漢学」を学ぶことによって人格を陶冶し、陽明学に基づき実用を以て「一世有用ノ人物トナル」ことを目指したといえる。

では具体的な授業は如何なるものであったのか。中洲の二松学舎における授業について、町泉寿郎氏は次のように述べる。

三島には『史記』『唐宋八家文』『文章軌範』や、『日本外史』などに関する「段解」と名付けた著作があり、日常の

講義でも大段落・小段落など段落ごとの趣旨と文章の構成を分析的に解説したといわれている。三島の教育目的が、漢文の講読や作詩文という「読み書き」を通して、論理性や分析力を身に付けさせようとする極めて実用本位のものであったことがうかがえる。⁹⁾

町氏によれば、創設当初の二松学舎ではあくまでも「実用本意」の教育がなされていた。このことは、当時の二松学舎が中等教育を補完する役割を担っていたこと、あるいは高等教育機関の入試に漢文があり、その対策のために漢文を教授していたことによる。

そのような性質を持っていたため、二松学舎に学んだ学生達の回想を見ても、特に明治前半は中洲から陽明学そのものの講義を聞くことは少なかったようである。

例えば、明治十四年（一八八一）から翌十五年（一八八二）にかけて在塾していた、後の陸軍中将松井庫之助（一八六七～一九四三）は「中洲先生は陽明学派の大家なることは承知し居りたるも、特に伝習録等の講義は之を聴きしことなし」と述べ、また明治十六年から翌十七年（一八八四）に在塾していた山田準は「元来余は二松学舎で中洲先生の伝習録講義を数回聴講するや否や古典科に入ったので、甚だ残念をした」と回想している。¹⁰⁾

松井は中洲が陽明学の大家であることを知りつつも『伝習録』の講義などは全く聞いたことがなかった。準の方も、在塾中に『伝習録』の講義が始まったものの、明治十七年九月東京大学古典講習科漢書課に入学したため、ほとんど中洲の陽明学講義を聞くことはなかった。中洲にとって、「実用」を重んじる二松学舎では、陽明学を集中的に講じる必然性はなかったのである。

ただ、中洲は二松学舎で陽明学を講じることは少なかったものの、『大学』を講義する際には王陽明（一四七二～一五二

九)の『古本大学』を用いており、その採用の理由を次のように述べている。

陽明学ハ矢張り道学ナレト、其工夫朱子ニ比スレハ更ニ精密ナル故ニ、实用ニ適切ナルコトモ一層勝レリ、是レ余カ我学問実行ノ工夫ニハ陽明説ヲ服膺スル所以ナリ、然レトモ其ノ説古訓詁ト郭書燕説ナルコトハ、或ハ朱子ヨリモ甚シカラシ、然ルヲ朱説王説トモニ一字モ古訓詁ニ違フコト無シト思フハ、読書ノ眼ナキモノト謂可シ、縦ヒ古訓ニ違フモ、古道ニ違ハサルヲ以テ目的トスルコソ真学問ナルヘシ、故ニ今日王説ニテ大学ヲ説ク所以ナリ^⑫

陽明学は、工夫において朱子学よりも「精密」であればこそ「实用ニ適切」である。その説には間々誤りもあるものの、中洲は「古道に違」うことがない「真学問」を目的とするから、『大学』を講じる際には必ず『古本大学』を用いていた。彼はやはり「实用」を重んじており、その根底に陽明学を位置付けていたことが分かる。

彼は教育勅語の発布される明治二十三年、その道德涵養論が盛んになっていた時期に「陽明の学を修むるが第一道德に入るの簡易方」^⑬と主張しているが、このことから彼が陽明学を用いて日常における道德を身に付けさせようと意識していたことが伺える。

以上のように、中洲は特に二松学舎創設当初は陽明学そのものを大々的に講じることは少なかったものの、「实用」「有用」といった点に力を入れて教育するために、また道德涵養のために陽明学を取り入れていた、と結論付けられる。

今後は更に踏み込んで、中洲の陽明学理解及びそれが講義へ如何に反映されているのかを、彼の講義録などを通して考える必要があるだろう。

二松学舎大学には「大学私録・中庸私録」^⑭という資料が所蔵されている。「私録」はいわば中洲の手控えであって、同資料には『大学』『中庸』の各文に対する中洲の解釈が記されているが、『大学』はやはり『古本大学』に拠っている。こ

の資料と、二松学舎における中洲の講義録である「学庸講義」などを比較することによって、中洲の陽明学理解と「実用」を重んじた彼の講義との差異を伺うことができるかもしれない。

附 三島復について

三島復は中洲の三男として明治十一年（一八七八）に生まれた。名復、字一陽、雷堂と号す。幼より読書を好み、明治三十年（一八九七）四月東京高等師範学校附属中学校卒業、明治三十四年七月第一高等学校卒業を経て、同年九月東京帝国大学文科大学漢学科に入学、明治三十七年（一九〇四）七月に卒業した。なお卒業論文では山田方谷を扱ったようである。⁽¹⁶⁾ 大学卒業後は、直接大学院に進学している。

一方で彼は、明治三十四年四月には二松学舎講師を嘱託され、その後も同年九月二松学舎会長代理、明治四十年（一九〇七）十二月二松学舎会長を勤め、中洲の息子として同校の経営に努めていた。彼は大正八年（一九一九）に二松学舎学長に就任し、学長のまま大正十三年（一九二四）二月一日に亡くなる、享年四十七。

本稿では、彼が明治四十二年（一九〇九）、三十一歳の時に提出した博士論文「陸王の哲学」について考えたい。

「陸王の哲学」は全七巻から成り、その構成は巻一・二は「陸象山の哲学」、巻三・四・五は「王陽明の哲学」、巻六・七は「陸王学評論」となっている。

これを見て分かるように、彼は陽明学に関する研究を以て博士の学位を取得しようとした。これは彼の学問的関心が陽明学研究にあったことを示している。中洲の息子として生まれ、さらに後述する二つの王学会に高校・大学在学中より参

加していた彼であれば当然とも言える。

しかし、提出された彼の博士論文は、結局受理されることはなかった。この間の事情を山田準次のように述べている。

先生は全く己の為にする学問でありましたから世の中にこちらから求めると云ことは決してなさらない例へば博士論文を書かれるにしましても側からは先輩や大学の教授の処に行て御相談なさつたり意見を御聞に成たら善かろうと思ふのに先生は頓と左様な行動も取られず博士論文もその筋へ提出されたが御通過に成らず済ました先生は自分か調べた丈を出せばよい通る通らぬは先方に在るので自分の關係した事でないと思ふやうに思ていらつしやつたらしい⁽¹⁷⁾

その後も復は、「嘗て大学上司論議者、考課無報者十余年。傍人不勝伎癢、君如不知者。(嘗て大学上司に論著を呈するも、考課無き者十余年なり。傍人伎癢に勝へざるも、君知らざる者の如し。)⁽¹⁸⁾」という態度であつた。すなわち、復の博士論文は提出されたものの、その可否の通知はなされず、周囲の人間は彼の博士論文の行方に関して齒がゆく感じていた。しかし、復自身は一向に関心を持つていなかったのである。この一文は復の君子的あるいは淡泊な性格を物語つてもいるが、本来であれば、これは東京帝国大学に対して訴えるべき由々しき問題であり、今日においては受理されなかつた理由を深く調べる必要がある⁽¹⁹⁾。

では、復の博士論文は幻に終わったのかといえば、実は二松学舎の門弟達によつて全七巻の内容が二冊に分散されて出版されることとなり、今日においてもほぼそのままの状態で読むことができる。これについてもまた、山田準に以下の発言がある。

一、著者ハ明治三十七年六月文科大学ヲ卒業シテ大学院ニ入り、専ラ陸王哲学ノ研究ニ従事シ、四十二年「陸王の哲学」七巻ヲ脱稿シ、七月之ヲ所司ニ提出セリ。其後大正十二年著者ハ前二巻陸象山ノ部ヲ「陸象山の哲学」ト題シテ

印刷二附ス。偶々年ノ九月大震災ニ遭ヒ、稿本及原版皆烏有二歸シ、明年二月著者亦没ス。其後著者ノ筐底ヨリ右ノ校正副本ヲ発見シテ再刊ニ附シ、十五年書肆宝文館ヨリ之ヲ発行セリ。而ル二十二年ノ震災ニハ大学ノ図書館悉ク烏有二歸シ、著者提出ノ七卷モ当然罹厄ト認メラレタルガ、昭和七年本書ガ市村瓊博士ノ許ニ完存セルヲ知り、請ウテ一本ヲ写シ、中三卷王陽明ノ部ヲ第一編トシ、末二卷評論ノ部ヲ第二編トシ、茲ニ之ヲ公刊スルコトヲ得タリ。²⁰

これによれば、博士論文「陸王の哲学」七卷は受理されなかつたものの、復は、大正十二年（一九三三）、おそらく博論の予備原稿として残っていた巻一・二「陸象山の哲学」を出版しようと印刷段階まで入っていた。しかし九月一日に発生した関東大震災によりこれを焼失し、さらに翌年に彼は亡くなつてしまつた。

しかし、復の死後、二松の門人らが「陸王の哲学」の校正副を発見、大正十五年に同じく中洲門下の浜隆一郎（一八九〇～一九八〇）の識語を附してこれを東京宝文館より出版した。この時出版された『陸象山の哲学』には復自身による「例言」が附されている。冒頭の二つを掲げよう。

一、この稿は十年以前の攻究にかゝり、筐底に蔵せしを稍之を簡略し、又之を通俗にして公刊することとせり。

一、陸王学の研究に余の微力を致したる、その発表の初篇としてこの稿を上梓し、更に王陽明の哲学と陸王学の評論とを逐次公刊して、大方の教を請はんと欲する心組なり。²¹

復の発言からは、博士論文の予備原稿を公にして識者の閱を請おうという学問的探求心を伺うことができる。復は『陸象山の哲学』について、その筐底に存していた博士論文を簡略にし、さらに分かりやすく語句を改めて出版しようとした。

さらに、今後「王陽明の哲学」「陸王学評論」を続けて出版する予定でいたようである。そしてこの計画は準の尽力によつて実現する。

前掲の準の発言に戻ろう。『陸象山の哲学』出版から七年後である昭和七年（一九三二）、復の博士論文「陸王の哲学」を、彼の主査であった市村瓚次郎（一八六四～一九四七）のもとより準が発見²²、さらにそれを写して、博士論文の卷三・四・五である「王陽明ノ部」を第一編、卷六・七である「評論ノ部」を第二編として、これを合わせて昭和九年（一九三三）『王陽明の哲学』と題して大岡山書店より出版した。同書には山田準撰文の「王陽明哲学序」及び「三島雷堂君伝」も附されており、復の陽明学理解について補足されている。

以上のように、復の博士論文は受理されず、さらに出版も彼自身によつては実現しなかつたものの、彼の没後に二松学舎出身者達の手によつて完成を見た。これらのエピソードからは、二松学舎出身者の横の繋がりを感ずることが出来る。

『陸象山の哲学』及び『王陽明の哲学』より復の陽明学理解を研究したものは少ないが、六百頁にも上る後者は特に、「脱稿は明治四十二（一九〇九）年にまでさかのぼるから、陽明学研究として最初の大著である」と評価される²³。よつて今後はこの二著を用いて復の陽明学理解やその特色、中洲の陽明学理解との相違点などといった、思想的研究を進めるべきであろう。また、博士論文が受理されなかつたことは、陽明学研究に対する当時の風潮をも踏まえて深く考える必要がある²⁴。

二 二松学舎と王学会

次に、明治三十六年九月創設の王学会²⁵と二松学舎との関係について論じる。

そもそも明治期に創刊された、陽明学を標榜する雑誌には以下の五つがある。

・吉本襄 『陽明学』（鉄華書院） 明治二十九年七月〜三十三年五月 八十号

・東敬治 『王学雜誌』（明善学社） 明治三十九年三月〜四十一年十月 三十一号

・東敬治 『陽明学』（陽明学会） 明治四十一年十一月〜昭和三年四月 百九十六号

・石崎西之允 『陽明』（大阪陽明学会） 明治四十三年七月〜大正七年十二月 八十三号

・石崎西之允 『陽明主義』（大阪陽明学） 大正八年一月〜十四年九月 六十四号²⁷

吉本襄は、日清戦争後の気運の中で国民精神を振興するために陽明学をその中核に据えて『陽明学』を創刊した。吉本以外にも、政教社の一員である三宅雄二郎（一八六〇〜一九四五）が『王陽明』（政教社、一八九三）を、建部遯吾（一八七二〜一九四五）が『陸象山』（哲学書院、一八九七）を、高瀬武次郎（一八六九〜一九五〇）が『日本之陽明学』（鉄華書院、一八九八）のち『改訂日本之陽明学』（榎原文盛堂、一九〇七）・『精神教育陽明学階梯』（鉄華書院、一八九九）を、井上哲次郎（一八五六〜一九四四）が『日本陽明学派之哲学』（富山房、一九〇〇）を出版しているように、この時期には個人個人の陽明学研究書が目立つ。

一方、組織的な陽明学研究は、明治三十二年（一八九九）頃に活動していた王学会がその始まりであろう。ただしこれは、明治三十六年創設の王学会と直接的な関係にはない。高瀬武次郎は次のように述べる。

余東都に在りし時、明治三十二年頃より雷堂君を始め、宮内鹿川、東正堂、歌人大口鯛二の諸氏と共に王学会を組織して、王学の宣伝に力めたり、又輪番に各自の宅に於て陸王心学等の講究を為したり、其時には子爵海江田信義翁も七十有餘の高齡を以て、時々王学会に出席されて、壮年の頃に西郷南洲翁と共に陽明学を講究せし事を始め、南洲翁に就て種々の談話を為されたり、柿内三郎博士の如きも熱心なる會員の一人たりしなり。²⁸

明治三十二年といえば、高瀬は東京帝国大学大学院在学、雷堂すなわち三島復は第一高等学校在学、宮内黙蔵（一八四六～一九二五）は二松学舎助教などを務め、東敬治（一八六〇～一九三五）は哲学館で陽明学を講じ、大口鯛二（一八六四～一九二〇）は宮内省御歌所に勤めていた時期である。彼らの繋がりが如何なるものであったのかについては詳らかにしないが、陽明学に関する講義を学生も含めた持ち回りで行っていたことは、近代日本における最初の組織的な陽明学研究活動として注目に値する。この王学会がいつ頃まで継続していたのかについても不明であるが、高瀬の書きぶりからは暫くは継続していたと推測できる。また、彼らは海江田信義（一八三二～一九〇六）・柿内三郎（一八八二～一九六七）も含めていずれも明治三十六年創設の王学会にもそれぞれ参加している。

①王学会の創立とその活動

右の王学会とは別団体の王学会が明治三十六年九月に組織された。その活動内容については、二松学舎大学附属図書館三島文庫に所蔵される「王学会記録簿」（以下「記録簿」²⁸）が詳細に物語ってくれる。

「記録簿」はすでに、筆者が町泉寿郎氏との共著で全文を翻刻し、さらに王学会における講演記録を表を整理し、王学会の活動と同時期に刊行されていた『王学雑誌』に講演内容が掲載されている場合には、それとの対応関係を示した。

この時に作成した表によって、王学会の講演内容が『王学雑誌』に掲載されることは少なかったことが判明している。すなわち、王学会と東敬治が中心となって発刊した『王学雑誌』とは密接な関係になかったと考えられる。このことは、後述するように、陽明学研究に対する両者の目指すべき方針の違い、および当時二松学舎で助教を勤め、なおかつ王学会

で中心的な役割をしていた宮内と東との仲違い、それに伴う開催場所の変更などが関わっていると推測される。

よってここでは、主に「記録簿」に基づいて王学会の活動の様子を略述し、王学会と東らが明治三十九年（一九〇六）に始める陽明学会とが如何なる関係であったのか、さらに開催場所が二松学舎に変更した経緯と変更後の王学会の活動について見ていきたい。

王学会は明治三十六年九月三十日に設立された。「記録簿」にいう、

明治三十六年九月三十日午後二時、王学会開設ノコトヲ小石川区水道端町五十八番地日輪寺ニテ協議ス。会スル者、
首唱者中尾捨吉、及ヒ春日仲淵・東敬治・宮内黙蔵ノ四氏トス。議畢リテ解散ス。

同日、宮内氏仮規約ヲ製ス。又王学会標札ヲ日輪寺ノ門柱ニ掲ク。但シ標札ハ宮内氏寄附ス。

記述によれば、この日、東京小石川区水道端町にある日輪寺において、中尾捨吉（一八四一〜一九〇四）の首唱により、春日仲淵（一八四三〜一九二〇）・東敬治・宮内黙蔵が賛同して、王学会が創立された。

主唱者である中尾捨吉は、号水哉、土佐江ノ口村の人。佐藤一斎門下の奥宮慥斎（一八一〜一八七七）に学んだ。維新後は陸軍や裁判所で勤め、晩年は広島で弁護士となる。明治三十六年夏、療養のために上京し、一方で王学会を首唱したが、翌三十七年に亡くなっている。吉本襄の師としても知られる。

その他、春日仲淵・宮内黙蔵・東敬治はいずれも幕末以来、各地の陽明学者の学統・血統を受けているが、大学には学んでおらず、民間学者と呼ぶべき人物達である。彼らの内、宮内黙蔵は明治二十八年（一八九五）よりすでに二松学舎助教を勤めており、彼の紹介により二松学舎に学んだ三島復や那智佐典などが後に王学会に入会している。

では、中尾らによって結成された王学会の活動は如何なるものであったのか。宮内作成の「仮規約」には次のように記

されている。

仮規約

第一条 本会ハ陽明学ヲ講究スルヲ以テ目的トス。

第二条 本会ハ永世無窮ニ継続スルヲ期スル力故ニ、何等ノ否運ニ遭フモコレヲ廢スルコトナシ。

第三条 会員ヲ分チテ左ノ三種トス。

特別会員・賛成会員・通常会員

第四条 特別会員ハ本会ヲ創立維持シ、及ヒ本会総テノ会費ヲ負担ス。賛成会員ハ本会ノ主旨ヲ賛成シテ入会スルモ

ノトス。通常会員ハ本会ノ主旨ヲ賛成シ入会シテ斯学ヲ講究スルモノトス。

但シ賛成会員・通常会員ハ何時ニテモ特別会員タルコトヲ得。

第五条 通常会員トシテ入会セントスルモノハ現会員ノ紹介ニ依ル。

但シ一切ノ会費ヲ要セス。

第六条 本会ノ講義及ヒ演説ヲ傍聴セント欲スルモノハ何人ト雖コレヲ許ス。

第七条 本会ノ開講日時及ヒ書目、当分左ノ如シ。

毎月第一日曜日午後一時ヨリ 伝習録

毎月第三日曜日午後一時ヨリ 伝習録

但シ講義後、演説又ハ談話会ヲ開ク。

第八条 本会講義ハ特別会員ノ担任トス。

但シ臨時賛成会員ノ講演スルコトアルベシ。又通常会員ニ於テ希望者アルトキハ講演スルヲ許ス。

第九条 本会ノ目的ハ専ラ王子ノ説ヲ遵奉スト雖、他ノ学ノ斯学ヲ裨補スヘキモノハ、広クコレヲ講究シテ隨時演説ヲナスコトアルヘシ。

第十条 本会幹事一名ヲ置キ、庶務會計書籍管理等ノコトヲ掌ル。

但シ幹事ハ特別会員ニ於テコレヲ互撰シ、任期ハ半ケ年トス。

第十一条 本会ニ文庫ヲ置キ、漸次経子・歴史・地理・哲学・理学・政治・法律・経済等ノ諸書ヲ購求貯蔵シ、斯学ヲ講究スル傍ラコレヲ研究シテ、国家経綸ノ材ヲ發達セシムルノ用ニ供ス。

第十二条 本会ハ春秋二季ニ報告会ヲ開キ、幹事諸般ノ報告ヲナスヘシ。

第十三条 本会ニ備フルモノ左ノ如シ。

会員名簿・記録簿・会計簿・書籍目録・書籍・新聞雜誌・文具・見臺一・書籍箱・硯箱其他

明治三十六年十月^⑩

これによれば、王学会は「陽明学ヲ講究スル」ことを目的とし、研究面に重きをおいて結成されたことが分かる。

活動内容としては、明治三十六年十月十一日より講義を中心とする例会がおよそ毎月一回行われ、明治三十七年六月五日の第八回例会が東京学院（神田区仲猿楽町）で行われると共に第一回公開演説会が開かれた。この時宮内は「開会ノ趣旨」なる演説を行っているが、仮規約を作成していたことも踏まえれば、彼を中心として王学会が運営されていたと推測できる。

公開演説会はその後もおよそ毎月一回、基本的に第一日曜日に行われた。開催場所については、はじめは東京学院であ

ったが、明治三十九年二月四日の第二十一回公開演説会から東洋殖民学校（神田区錦町）で、同年六月十日の第二十五回公開演説会からは、途中より記録が欠けているものの、開成中学校（神田区淡路町）であったと思われる。こちらは「記録簿」による記録の限りでは明治四十一年十月四日の五十一回まで行われた。

公開演説会は、第一回より順調に行われていたものの、一方で、第九回例会が行われたのは明治三十七年十二月十一日であり、その時、名称も講究会と改められた。

講究会は、基本的に毎月の第二日曜日に各宅持ち廻り、あるいは学士会集会所（神田区錦町）などで行われた。こちらは「記録簿」による記録の限りでは明治四十一年十月十一日の三十四回まで行われた。内容としては『伝習録』などの講義を会員持ち廻りで行うものであったが、明治四十一年は、そのほとんどを宮内黙蔵及び三島復が担当していた。

王学会の活動日時・場所について、説明が煩瑣になったが、王学会の活動自体も度々休会や聴衆の減少など安定したものであったとは言えず、それでも会員によつて何とか継続を試みようとする姿勢を伺うことができる。

公開演説会では、王学会の書記を務め、後に京都大学教授となった高瀬武次郎や、伊予の著名な陽明学者大塚豊三郎（一八六九〜一九四〇）などが演説しており、また入会者には遠藤隆吉（一八七四〜一九四六）などもおり、王学会の活動が広く行われていたことが分かる。

次に王学会と、明治三十九年三月二十五日に『王学雑誌』（明善学社）を発刊し、明治四十一年十一月三日にその継続雑誌として『陽明学』（陽明学会）を発刊した東敬治との関係について述べよう。

東敬治、号正堂は、東澤瀉（一八三二〜一九〇二）の長子として万延元年（一八六〇）三月二十四日に生まれ、哲学館や国学院などで教員として勤める傍ら、明治三十六年の王学会創設メンバーの一人であった。彼は、王学会の活動に参加する

傍ら、自身が中心となって明善学社を設け、『王学雑誌』を創刊している^①。明善学社はその後陽明学会と改名し、誌名も『陽明学』と改めた。

『王学雑誌』に掲載される論考は、ほとんど王学会の講演と関わりがなかったことは先述した。数でいうと、王学会における公開演説会の題目数約百三十に対して『王学雑誌』に掲載されたものは僅かに八であった。ただし東は、雑誌刊行後も王学会には参加しており、関係が全く断絶していたとまではいえない。

東の活動の中心が移っていったことは、王学会の目的が「陽明学ヲ講究スル」というのに対し、東の起こした明善学社が「陽明王子の学を振興し以て世道人心の扶植に資する」ことを目的として始まったという、いわば方向性の違いによるものであると推測できる。

王学会の活動に関して、「記録簿」の記載は明治四十一年十月十一日を以て終わっているが、これは丁度東が陽明学会へ改称した時期と重なっている。これが偶然なのか、はたまた王学会と陽明学会との完全なる決別を意味しているのかは不明である。

「記録簿」の記録が終わってからも王学会の活動は続いていた。それを証拠付ける資料は『二松学友会誌』において見られる。しかしそこに記されるのは、明治四十二年八月に東敬治と宮内黙蔵との仲違いにより、王学会の開催場所を斯文学会（神田区錦町）から二松学舎に変更して活動を継続していくということであった。『二松学友会誌』二十四号には次のように記されている。

宮内黙蔵氏の三島復氏と共に主として管理せらるゝ王学会は従来斯文学会にて開きしを去る八月より二松学舎に於て毎月開会することゝなれりその規約は左の如しと云ふ^②

この変更の理由は何か。吉田公平氏の「宮内黙蔵年譜稿」には次のように記されている。

王学会の友人であつた東敬治が明治41年に「陽明学会」を旗揚げし、明治42年に宮内黙蔵が主管する王学会を「陽明学会」に合併しようと謀つたために、宮内黙蔵が激怒し、事務所を移転した。（『自叙伝』『二松学友会誌』24輯。明治42年12月）。以後、宮内黙蔵は大正6年まで東敬治と絶交。³³

これ以上詳しいことは分からないが、ともかく、東は宮内の主管する王学会を陽明学会へ吸収しようと謀り、それに反発した宮内王学会の開催場所を、すでに開成学校より変更していた斯文学会よりさらに二松学舎に移転した。

この時に宮内・東両者が王学会の運営を原因として不仲になったことは事実であろうが、「記録簿」においてはこれよりもかなり遡る明治三十七年六月五日の記録に「尤今後開会ノコトニ付、東氏、宮内氏ト異見アリ。異日ノ確定ヲ要ス」とあつて、会の運営に関する両者の意見の対立はこの時が初めてでなかつたことが分かる。共に陽明学を主唱し、約七年間王学会を運営してきた両者はここで活動を異にすることとなる。

では、宮内黙蔵が二松学舎に開催場所を移して以降の王学会の活動は如何なるものであつたのか。

②王学会と二松学舎

明治四十二年八月以降、二松学舎において行われていた王学会については、『二松学友会誌』の彙報欄より伺うことができる。まずは同誌二十四号に掲載される「王学会規約」を掲げよう。

王学会規約

第一条 本会は陽明学を中心として儒教全般を講究し以て精神を修養し道德を振興するを目的とす

第二条 会員を分ちて特別会員通常会員の二種とす

特別会員は本会の庶務を議し総ての経費を負担するものとす

通常会員は何時にても特別会員たることを得

第三条 特別会員は本会の経費として毎月金拾銭以上を納むるものとす

通常会員は納金を要せずたゞ入会の際住所姓名を通知すべし

第四条 本会の演説講義を来聴せんと欲するものは何人と雖之を許す

第五条 本会の開講日時及び会場左の如し

毎月第一日曜日午後一時より麹町区一番町四十六番地二松学舎に於て演説及講義

第六条 本会の講師及演題等は其都度之を二松学舎及び府下の重もなる新聞紙上に掲示す而して会場及日時に変動あるときに限り特にこれを会員に通知す

第七条 本会の主とする所は儒教にありと雖他の学説の斯道を充補し若くはその参考に供すべきものは広くこれを講究すべし

第八条 本会に特別会員中より幹事一名を撰び庶務会計等の理事を掌らしむ

この規約を見れば、王学会における規約から大きく変更してないことが分かる。やはり、宮内の目指すところは「陽明学を中心として儒教全般」を講究することであった。当時と異なるのは、そこに「精神を修養し道德を振興する」ことが

付け足されていることである。宮内は明治三十九年五月に時の文部大臣牧野伸顕（一八六一―一九四九）に対して「国民道徳の既往と将来のこと」について建言しているが、その時に日本の国民道徳は「彝倫の大道より割り出されたる実践道徳である」「神勅」につつまれており、これを「扶翼」するのは仏教でもキリスト教でもなく、儒教であると述べている。³⁵⁾日清・日露戦争の勝利を経た当時の日本において、国民道徳と儒教を結びつけようとする宮内の思想を読み取ることができると述べている。

次に二松学舎における王学会の具体的な活動について、再度『二松学友会誌』の記述を引用してその様子を伺おう。

・二松学舎学友会『二松学友会誌』二十七号「彙報・課外講演」明治四十五年一月毎月一回催さるゝ課外講演は近來多くは第一日曜午後六時より王学会と併せて挙行せらる

・同二十八号「彙報・課外講演」明治四十五年八月
毎月一回日曜の午後六時より王学会の伝習録講義と併せ行はるゝ、…

・同二十九号「彙報・課外講義」大正元年十二月
毎月一回日曜の午後七時より宮内黙蔵翁若くは三島舎長の王学会伝習録講義に次で行はるゝ、…

詳しい活動内容までを知ることができないが、二松学舎における王学会は、主に宮内黙蔵または三島復を講師として「伝習録講義」が毎月一度、日曜日に、二松学舎における課外講義と同時に行われていた。ただ、「公開演説会」も引き続き開催されていたのか、また王学会がこの後いつ頃まで継続していたのかについては不明である。ちなみに、課外講演以外にも二松学舎では「日曜講義」も行われており、そこでも両者は『伝習録』も講義していた。

この他、二松学舎では大正十二年四月から大正十四年（一九二五）九月まで『二松学舎講義録』を三十号にわたって刊

行しており、宮内は『伝習録』の講義録を担当しているが、その内容は、王学会における「伝習録講義」の内容とほとんど変わらないはずである。同書からも二松学舎における陽明学講義の様子を伺うことができる。

三 三島中洲からの継承―二人の門人と二松学舎

次に、三島中洲の門人二人を取り上げ、明治期から昭和期までの二松学舎と陽明学との関係について述べる。

中洲より直接学んだ門人の数は相当数にのぼる。その内、中国学の方面で著名な人物といえば、京城帝国大学教授も勤めた児島献吉郎（一八六六―一九三二）、『史記補注』や『日本詩話叢書』全十巻などを著した池田四郎次郎（一八六四―一九三四）などが挙げられるだろう。

右の二名も二松学舎との関係は生涯を通じてあったものの、本稿では、より二松学舎と関わりが深く、陽明学者と呼ぶべき二人の人物、すなわち山田準と那智佐典を取り上げ、両者の経歴及び陽明学に関する活動や考え方について論じる。

①山田準

山田準は、慶応三年（一八六七）備中松山藩高梁に木村豊（一八一六―一八六九）の三男として生まれた。名準、字士表、済齋と号す。地元の小中学校で学ぶ傍ら有終館で漢学を修める。明治十六年上京して二松学舎の学僕となり、同時にその課程を修める。翌十七年（一八八四）山田方谷の養嗣子山田耕蔵（一八三九―一八八一）の長女春野（一八七〇―？）と結婚し、

山田家を嗣ぐ。同年九月東京大学古典講習科漢書課に入学、島田重礼（一八三八～一八九八）などに学ぶ。明治二十一年（一八八八）七月漢書課卒業後は、二松学舎の幹事などを務め、続いて明治二十七年（一九〇四）十二月城北尋常中学校教諭、明治三十二年十月熊本第五高等学校教授、明治三十四年鹿児島第七高等学校教授を経て、大正十五年六月二松学舎学長に招聘され、昭和二年（一九二七）一月上京、翌三年二月専門学校設立に伴い同院校長となる。昭和十八年三月校長を辞して郷里高梁に帰郷、『山田方谷全集』編集に従事する。『山田方谷全集』三巻は昭和二十六年（一九五二）に刊行され、準は翌二十七年（一九五二）十一月二十一日に亡くなる、享年八十六。

彼の陽明学関係の著作には『陽明学精義』（鹿児島王学会、一九二六）、『陽明学概論』（共立社、一九三三）などのほか、日本放送協会による昭和九年八月一日から十一日までのラジオ放送における修養講座で「陽明学講話」を講じて成った『陽明学講話』（章華社、一九三四）があり、これは昭和五十五年（一九八〇）に二松学舎大学陽明学研究所より新版が刊行されている。その他、彼は陽明学に関する論文も多数執筆している。

彼の陽明学研究に対する貢献として特筆すべきは、鹿児島王学会の活動であろう。その活動は、東敬治主編の『王学雑誌』及び『陽明学』の彙報欄、「山田済斎年譜略」³⁶（以下「年譜略」）から伺うことができる。以下、それらの記述によってその活動を紹介しよう。

鹿児島王学会は明治四十一年九月、当時第七高等学校教授であった準に対して地元有志が陽明学を講じるように依頼し、同月二十四日から毎月二回準が『伝習録』を講じることとなった。「年譜略」によれば、この時の参加者は「医学士加藤好尚・弁護士日高尚剛・陸軍副官田中温之・農学博士玉利喜造・医士佐々木直介等凡五十余人」がいた。漢学者に限らず、陽明学を学ぼうとする人々が多くなることが分かる。これは西郷隆盛（一八二八～一八七七）以来、陽明学への関心

が同地で高まっていたからであろう。

準による『伝習録』講義は大正三年（一九一四）四月にひとまず読み終え、再びその巻首より読むこととなった。さらにこれに加えて『古本大学』の講義も毎月二回行うこととなった。

また同年八月一日から三日には「鹿児島王学会陽明学研究会」が開かれ、東敬治が鹿児島を訪れて講演、準を始め鹿児島王学会の会員もそれぞれ講演を行っており、それぞれの講演内容は『陽明学』に収録されている。³⁷

この鹿児島王学会は、昭和二年一月準が二松学舎学長として上京するまで同地において続けられていた。

では、準が二松学舎に赴任した後はどうであったかと言えば、実は、場所を移して東京においても王学会は継続されていた。「年譜略」昭和二年四月条には次のように記されている。

四月王学会第一回を青山穂原小学校に開く。君の薩中に在る、王学会を主宰すること十九年、既に東帰す。薩摩出身山口九十郎中将来り、又其会を継がんことを要請す。君已むを得ず之を諾し、月次二回講会を開き「伝習録講本」を輯して課書に充つ。軍部大中将凡人其他有志凡四十人会員に列す。

これによれば、鹿児島出身の海軍中将山口九十郎（一八六五～一九二八）の要望によつて鹿児島王学会が形と場所を変えて継続されていたことが分かる。³⁸ テキストには「伝習録講本」を用いて、毎月二回講じられていた。

この後、「年譜略」昭和六年（一九三一）二月条には「二月王学会、「伝習録講本」を講了し、「大学古本」を開講す」とあり、昭和六年二月からは『古本大学』が講じられていたことが分かる。準は学外においても、積極的に陽明学の講義をしていたのである。

準は、明治二十九年（一八九六）十一月から明治三十二年十月まで陸軍編修書記を務めており、早くから軍部との関係

を有していた。軍人らが何故これほどまで陽明学を学ぼうとしていたのか、「大中将六人」がどのような意図を持って王学会に参加することとしたのか、陽明学に対する彼らの関心や、準と軍人との繋がりについては今後、更なる研究を要する。

このようにして始まった王学会は、準が昭和十八年三月二松学舎専門学校校長を退任して高梁に帰郷する時まで継続していたようである。「年譜略」昭和十八年三月条にいう、

山田準、王学会の講席を幸すること十七年、会中諸子、陽明会員と謀り、君を目黒驪山荘に招饗して別を叙す。君、左の詠あり。

姚江東派探珠不 姚江東派探るや不や

承乏講筵十七秋 乏しきを承け講筵すること十七秋

斯学一心師法在 斯学一心師法在り

時艱祗合贊皇猷 時艱祗だ合に皇猷に贊すべし³⁹

これは送別の記事であるが、準による漢詩の三句目「斯学一心師法在」からは、彼が山田方谷・三島中洲の教えを継承していたと自任していたことが伺える。

彼は高梁帰郷後、『山田方谷全集』の編纂に従事し、昭和二十六年に全三巻を刊行し、翌二十七年亡くなっている。彼は若い時から山田方谷の著作を整理しており、晩年になってようやくそれが結実した。彼が祖父方谷を顕彰しようとした態度からは、やはり「斯学一心師法在」という意志を感じ取ることができる。山田方谷の陽明学理解に焦点を当てた研究はそれなりに蓄積されているが、そのために準が果たした役割は見逃すことができない。

②那智佐典

那智佐典は、明治六年七月十日千葉県香取郡馬村に那智正敬、母大柳氏の下に長男として生まれる。名敬典、通称佐典、字天叙、惇齋と号す。

那智家は代々神職で、佐典も幼少から祖父より敬神愛国の訓誡を聞いて育った。明治十九年（一八八六）無逸塾で渡辺存軒（一八五五～一九二〇）に学ぶ。そして明治二十三年四月二松学舎に入学して、中洲より陽明学を学んでおり、深い感銘を受けていた。「伝統と権威をほこる二松学舎大学」と題する記事に那智の次の言葉が記されている。

最も私共の肺腑に浸み込みたるは伝習録であった。当時は唐宋八家文や文章軌範の時は、数十名の聴講生があつたが、伝習録の受講者が僅に二三名を数えるに過ぎなかつた。¹⁰

彼は松井や準とは異なり、中洲の講義で最も心に残っているのは『伝習録』であつたと回想している。ただ、その受講生は少なかつたことが伺える。二松学舎内部における陽明学への関心は、この時それほど高くなかつたのであろう。この発言は先述の二松学舎における教育の位置付けを示す証左となる。

那智はその後、明治二十七年三月二松学舎を卒業して助教となるが、翌二十八年郷里に帰り、二松学舎分校に属する私塾菁菁学舎を創設、近隣故旧の勧めにより漢学を講じた。「菁菁」は、中洲が、『詩経』「小雅・菁菁者莪」の詩序に「菁菁者莪、樂育材也。君子能長育人材、則天下喜樂之矣。（菁菁者莪は、材を育するを樂しむなり。君子能く人材を長育すれば、則ち天下之を喜樂す。）¹¹」とあるのに基づいて命名した。しかし明治三十四年三月には菁菁学舎を廢校にし、再び二松学舎に入學、中学校などで教鞭を執る傍ら中洲の講義を聴き、また詩文の添削を請うた。明治三十五年（一九〇二）には二松学舎

の塾頭を命じられる。その後は大正十一年（一九二二）まで同学舎で教授、漢文科主任として活躍、大正十二年より大東文化学院教授（大正十五年）、昭和二年一月実践女子専門学校講師（昭和十一年）、同年十二月駒澤大学講師（昭和十六年）、昭和三年一月大東文化学院教授（昭和二十三年）を務めた。同年二月二松学舎が専門学校となるに際し教授に就任し、昭和八年（一九三三）二松学舎理事となる。翌九年には東伏見宮大妃殿下へ「支那秦漢唐史」を進講した。

そして、昭和十八年四月山田準の後を引き継ぎ、二松学舎専門学校第二代校長に就任、漢学専修二松学舎舎長を兼ねる。彼はこの時「就任の辞」にいう、

先生（山田準・引用者注）の後を襲ぐべき方は、中洲先師御門下先輩若しくは教授各位及び御嫡孫三島一君等其の人乏しからざるに、何事ぞ理事長殿始め理事諸君の御推薦にあづかり、愚昧浅陋なる某が此の重任を辱うするに至らんとは。学徳なく才能なく、況して閱歷なく頑冥にして機を見るの明なく魯鈍にして、時に応ずるの智なきを以て其の器に非る点を述べ御辞退せしに、再三熟議の結果、之を擬することにたりたる故、数十年先師の恩を受け居れば、其に報ずる積りにて承知せよのことに相成り、たゞ師恩を説かれては一言の申訳も出来兼ね、遂に自ら揣らず、傲然憚りも無く統貂の非難をも顧みず、御請仕ることになりましたのであります。¹²

那智の謙遜の辞が盛り込まれた発言であるが、彼が中洲をはじめとする「師恩」に報いるという気概を持つて職務を果たしたであろうことは想像に難くない。

その後の彼の二松学舎内での役職は、昭和二十六年四月二松学舎大学長兼附属高等学校長に就任、昭和三十年（一九五五）十月学校法人二松学舎理事長を勤め、昭和三十七年（一九六二）理事長・学長を辞任、学校法人二松学舎顧問・二松学舎大学名誉学長を贈られる。

さらに、昭和四十四年二松学舎長に推戴され、教授及び二松学舎研修熟長の職は従来通りで、大学における講義を継続していたが、昭和四十四年十一月二十一日逝去、享年九十六。著作には『惇斎詩文稿』などがあるが、あまり多くはない。以上のように長年二松学舎に勤めていた那智の陽明学に関する見方は『陽明学』十七号「那智惇斎特集」において詳述されている。その内の、濱久雄「那智惇斎の学問と思想」^⑬に、那智が著した「数学半説」が取り上げられている。本稿でも「数学半説」の一部を掲げてその陽明学思想の一端を紹介しよう。

士至聖人而止矣。聖人之学致知格物而已矣。致知何也。致我良知、是也。格物何也。正物歸之正、是也。夫正物歸之正矣、斯致我良知也。致我良知矣、斯聖人也。：何則資之其師、能修我良知、教之其徒、而能正物不正者。正物不正而能致我良知。然則修我良知者、是吾学問之半也。正物不正者、亦是吾学問之半也。兼而合之、則真知之。然後聖人之学全矣。故曰数学半。^⑭

士は聖人に至りて止む。聖人の学は致知格物のみ。致知とは何ぞや。我が良知を致す、是なり。格物とは何ぞや。物を正して之を正に歸す、是なり。夫れ物を正して之を正に歸す、斯れ我が良知を致すなり。我が良知を致す、斯れ聖人なり。：何んとなれば則ち之を其の師に資り、能く我が良知を修め、之を其の徒に教へて、能く物の不正を正す者なり。物の不正を正して能く我が良知を致す。然らば則ち我が良知を修むる者は、是れ吾が学問の半ばなり。物の不正を正す者は、亦た是れ吾が学問の半ばなり。兼ねて之を合すれば、則ち真に之を知る。然る後聖人の学は全し。故に曰はく数学ふるは学ぶの半ばなりと。

彼は「聖人の学は致知格物のみ」と言い、その中身について詳しく説明している。そして最後に、「我が良知を修むる」と「物の不正を正す」ことを「兼ねて之を合すれば、則ち真に之を知る。然る後聖人の学は全し」と述べている

ように、彼の学問の中心には陽明学があった。このような意識を持って昭和四十四年まで二松学舎大学の中心的存在として学生へ教授していた。

以上、二松学舎出身者達の中には陽明学を信奉する人々がおり、陽明学研究の成果を様々な形で世に出していた。大学昇格後の二松学舎の授業においても『伝習録』の授業などがあったことはもちろんだが、正式なカリキュラム以外にも、宮内・復による王学会の日曜の講義や、準が東京で再び主宰していた王学会など、有志による陽明学の学習が進められてきたことが分かる。

彼らが「師法」や「師恩」を常に意識して陽明学に関する活動をしていたであろうことは想像に難くない。次に現在まで活動を続ける陽明学研究所について紹介する。

四 陽明学研究所の設置

陽明学研究所は、昭和五十二年（一九七七）の二松学舎創立百周年を機に、翌五十三年四月、理事長兼学長であった浦野匡彦によって設置された。

そもそも浦野は中国留学中である昭和八年の五月から十一月にかけて中国各地の学者や王陽明の遺跡を巡って、その報告として「滿支に於ける陽明学の現状」を著しているが、その「むすび」において「支那に於ける陽明学の現状は、一口に言へば、消滅であります」と結論づけている⁽⁴⁾。このような当時の感慨は、次に述べるように、のちに浦野を陽明学研究所の開設へと導いたと考えられる。

研究所設置の理由に関して浦野は、二松学舎に流れる陽明学の系譜を重視し、また「特に最近では陽明学については、三島由紀夫の事件と結びつけてあまりにも行動的というか、薄っぺらな印象をもたれては困りますから、世間一般からもそういう誤解をされないように、真の陽明学研究のための地道な陽明学センターというようなものをつくってみたい」と述べている。⁴⁷

この発言は二松学舎創立百周年を迎えた昭和五十二年二月一日の対談中の発言であるが、浦野は、三島由紀夫（本名平岡公威、一九二五～一九七〇）が昭和四十五年（一九七〇）十一月二十五日に起こした「三島事件」⁴⁸を受けて、これと一線を画した「真の陽明学研究」を二松学舎大学で行おうとした。具体的な活動についても彼は、「いろいろな資料を集めて、研究者はもとより、一般の人達にも、陽明学については、二松学舎にゆけばあらゆる資料もあるし、すべて教えてもらえるのだというものになりたい」⁴⁹と述べている。この発言からは、二松学舎大学の陽明学研究を中心として世界へ向けてその成果を発信しようという姿勢が伺える。

一方で、当時の中国における陽明学研究の状況は如何なるものであったのか、一瞥しておく。

山下龍二（一九二四～二〇一一）によれば、昭和二十四年（一九四九）十月の中華人民共和国成立以前より、陽明学に対する評価としては、①自由主義的評価と②マルクス主義的評価というように立場が二分しており、①は「陽明学全体を平等主義・自由解放の思想と見るところの近代性肯定の立場」であり、②は「王陽明を封建的反動思想」と評価する立場であった。中華人民共和国成立以後は、特に①の立場は台湾へ引き継がれ、②は大陸における主流となり王陽明の学説を否定的に見ていた。⁵⁰

その後、大陸の側では、昭和四十一年（一九六六）～同五十一年（一九七六）の十年にわたる文化大革命によって儒教そ

のものが否定され、錢明氏は「ある意味で言えば、私たちが本当に科学的マルクス主義に導かれ、王陽明の学説へ深く入り、体系的に研究し、その起源と流れ、その特徴と本質的価値、社会的・歴史的役割を明らかにしたのは、一九七九年の学術思想開放以後であった」と述べている。^④

すなわち、浦野が陽明学研究所を設置しようと考えていた時、中国大陆においては文化大革命の影響によって、儒教そのものが否定的に見られており、陽明学も「封建的反動思想」として否定的に評価されていた。留学期にも陽明学の現状を見つけていた浦野は、当然右のような中国における陽明学の扱われ方も把握していた。^⑤

以下、このような時代背景の中で設置された研究所について、まずは昭和五十三年五月一日施行、同五十四年五月一日一部改正施行の「研究所規程」を掲げ、その活動目的を見てみよう。

研究所規程

第一条 二松学舎大学に陽明学研究所を置く。陽明学研究所（以下研究所と称する）は陽明学に関する総合的研究を行う。い吾が国精神文化の発展に寄与することを目的とする。

第二条 研究所に次の職員を置く。

所長・所員・研究員

前項の職員の外事務的事項を処理するため主事を置く。

第三条 所長は二松学舎大学長又は学長の推す二松学舎大学の教授をもってあてる。

所員は二松学舎大学の教授および助教授中より学長が依嘱する研究員は二松学舎大学の講師、助手又は附属の高等学校教諭、その他の職員で所員の推薦ある者につき学長が依嘱する。主事は二松学舎大学教職員中につき学長が命

ずる。

第四条 前条の職員の外広く学外の研究者で、適任者があるときは所員会議の議を経て夫々所員又は研究員を依嘱することができる。

第五条 研究所に顧問および参与を置くことができる。顧問および参与は所員会議の議を経て推薦された者につき学長が依嘱する。

第六条 研究所は次の事業を行う。

- 一、研究成果の発表
- 二、講演会・講習会の開催
- 三、外国人研究者との交歓
- 四、陽明学関係図書の蒐集
- 五、その他研究所の目的達成に必要な事業

所長所員顧問参与は左の通り

所長 浦野匡彦

顧問 安岡正篤

参与 池田松郎・小林日出夫

所員 岡田武彦・山田琢・宇野精一・石川梅次郎・市川安司・赤塚忠・佐古純一郎・洪樵榕・(兼主事) 中田勝^③

陽明学研究所は、初代所長に浦野匡彦、研究所顧問に安岡正篤(二八九八〜一九八三)、参与に池田松郎(一九二〇〜一九

九七）・小林日出夫（一九二七～二〇〇七）という体制で出発した。その他所員には学内外の中国思想の専門家を揃えている。また、主事を務めた中田勝（一九二六～二〇一五）は、大学その他の運営業務で忙しい浦野に代り、実質的な運営を任せられていた。

顧問を務めた安岡は、昭和三年一月頃山田準に金雞学院における講義を依頼していたことが二松学舎大学に所蔵される山田準宛安岡正篤書簡より分かる（実際に準が講義をしたかは不明）。⁵⁴ 二松学舎と安岡との関係はこの時より始まったようである。その後、浦野が昭和七年春より準を通じて安岡と関係を持ち始め、昭和五十年（一九七五）には小林と共に安岡の自宅へ赴いて二松学舎大学顧問を依頼しており、安岡はそれに答えて顧問に就任している。⁵⁵ この他、安岡は昭和五十二年には二松詩文会の顧問にも就任し、昭和五十六年（一九八一）には陽明学研究所より『陽明学十講』も出版するなど、亡くなる昭和五十八年（一九八三）十二月まで二松学舎と関係を持ち続けた。

また、陽明学研究所の構成員の内、二松学舎専門学校の卒業生としては、石川梅次郎（一九〇九～二〇〇三）（一回生）、浦野匡彦・池田松郎（ともに二回生）、佐古純一郎（一九一九～二〇一四）（十一回生）、洪樵榕（一九二一～二〇二二）（十四回生）、中田勝（十六回生、大学二十二回生）、小林日出夫（十七回生）各氏がいる。また山田琢（一九一〇～二〇〇〇）は準の六男である。

設立後の研究所の所属については、平成十六年（二〇〇四）四月東アジア学術総合研究所設置に伴い、その附属として陽明学研究所となつて所長は主幹に改称され、平成二十年（二〇〇八）四月陽明学研究室となつて主幹は室長に改称され、平成三十年（二〇一八）陽明学研究中心となつて室長はセンター長と改称され、現在に至っている。

次に、歴代の所長・主幹・室長・センター長を列挙しよう。

- ① 所長 浦野匡彦 昭和五十四年（一九七九）五月就任
- ② 所長 市川安司 昭和五十七年（一九八二）四月就任
- ③ 所長 洪樵榕 昭和六十一年（一九八六）四月就任
- ④ 所長 中田勝 平成五年（一九九三）四月就任
- ⑤ 所長 松川健二 平成八年（一九九六）四月就任
- ⑥ 所長 川久保廣衛 平成十四年（二〇〇二）四月就任
- ⑦ 主幹 張明輝 平成十六年（二〇〇四）四月就任
- ⑧ 主幹／センター長 田中正樹 平成十八年（二〇〇六）四月就任 ※現任

歴代の所長は基本的に宋明理学を専門とする教員が就任している。彼らの内、浦野・洪両氏は二松学舎専門学校で山田準に直接習い、他にも中田・川久保廣衛（一九三四～）（大学三十五回生／昭和四十七年（一九七二）博士課程単位取得満期退学）・張明輝（一九三七～）（昭和四十八年（一九七三）博士課程単位取得満期退学）各氏も二松学舎専門学校、同大学あるいは同大学院で学んでいる。

開設当初は資料収集に力を入れており、「研究所規程」第六条の四「陽明学関係図書蒐集」に関しては、吉本襄・東敬治らの陽明学雑誌のマイクロ化が当時二松学舎大学助教授・陽明学研究所所員兼主事であった中田勝によって行われている⁷⁹。また、開設年である昭和五十三年には、夏期公開講座として陽明学の講義を行っている⁸⁰。

次に開設後の具体的な陽明学研究所の活動について、台湾議会秘書長、合作金庫第三任理事長や中国文化学院（昭和五十五年中国文化大学に昇格）教授などを務めた洪の著述より整理してみよう。

まず、陽明学研究所の設置当初より洪が所長に就任するまでは、それほど活発に活動していなかったようである。これについて洪は、浦野が理事長と学長を兼務しており多忙であったこと、前任の所長である市川安司（一九一〇～一九九七）が陽明学より朱子学の研究において優れたものがあつたことを理由にあげる。⁶⁴

そのような現状のもと、三代目所長に就任した洪は、活動を活発にするため、かなりの意気込みを持っていた。

筆者が三代目の所長に就任した後、先づ考えたことは以前静態を保っていた陽明学研究所を如何に動態に持ち込んで行けるか？如何に積極的に日本の学界に貢献出来るか？この全国で唯一しかない研究所を、如何にして研究する者達と呼吸を合致させることが出来るか？所長は所長の使命を果さねばならない。⁶⁵

このような意気込みのもと洪はさらに、①『陽明学』を全国の各国公・私立大学及び各都道府県図書館・文化施設へは全て寄贈すること、②研究所長の勤務時間の確保、③研究所の蔵書や資料の蒐集を行うことを決め、広く陽明学研究者や学生へ貢献するために尽力した。ここで注目すべきは洪が機関誌『陽明学』を創刊したことである。

『陽明学』創刊の事情について、さらに詳しく洪の別の著作より伺おう。

平成元年（一九八九）三月二十一日『陽明学』を創刊し、陽明学に関する資料、陽明学関係の新刊書、シンポジウムの成果や研究をまとめるとともに、二松学舎大学の教授に限らず、学内外の研究者に研究論文の執筆を依頼することとした。特筆すべきは、創刊号は権威を持たせなければならないため、当然のごとく陽明学研究に権威ある学者に優先的に寄稿を依頼したことである。：同時に、研究所員は陽明学関係の情報に折々気を配り、また日本全国の学者と連絡を取り続け、彼らが東京に来た際には我々のもとへ訪ねてくれるようになった。私は編集責任者で、発行人は当時の理事長小池良雄であった。予算の一部に充当するため広告を載せ、資金不足の際には学校が組んだ研究所の経費

より捻出した。また全国各大学および都道府県の公立図書館に送り、各分野の研究のための参考書とした。⁽⁶¹⁾
『陽明学』に対する洪の意図、刊行を継続するための経費捻出の苦心などが伺える。

ここにおいて、陽明学研究所は平成元年より毎年一回、機関誌『陽明学』を発行することとなった。題辞は岸田明道が担い、毎号「○○特集」と銘打って、研究所員や寄稿される陽明学研究者の論文その他を発表することとなった。「機関誌」としたことも論文・特集・研究所の活動紹介など、幅広く紹介する目的があった。⁽⁶²⁾

創刊号は「山田方谷特集」であり、冒頭には当時の二松学舎大学理事長小池良雄による「『陽明学』発刊のことば」が掲げられている。

二松学舎の創設者三島中洲は山田方谷に学び、又昌平黉で佐藤一斎に学び、陽明学の造詣が非常に深かったことは言うまでもない。その創設した王学会が専門学校初代校長山田濟斎によって継承され、私も佐古学長と一緒に濟斎先生に「伝習録」を学んだのである。今や陽明学はわが二松学舎の伝統と言っても過言ではあるまい。…

本学は創立百周年を期して陽明学に関する総合研究を行い、わが国精神文化の発展に寄与する目的で陽明学研究所を創設した。陽明学思想の啓蒙をはかり、資料蒐集の外「陽明学講話」「陽明学十講」「伝習録新講」などの著書を発行して来た。

今日この「陽明学」の創刊号発行にあたり、本書が引き続き日本の社会及び学界に寄与されんことを念願する次第である。⁽⁶³⁾

二松学舎専門学校十一回生である小池は、三島中洲の陽明学の造詣が深かったと述べると共に、「その創設した王学会が専門学校初代校長山田濟斎によって継承され、私も佐古学長と一緒に濟斎先生に「伝習録」を学んだのである」と思い出

を語っている。しかし、ここでいう中洲が「創設した王学会」とは、おそらく中尾らが創設した王学会の誤りであり、準が継承したというのは、おそらく鹿児島王学会が東京でも引き続き行われていたことを指しているであろう。その様な認識の齟齬はあるものの、それでも二松学舎内外における陽明学の講義が二松学舎関係者によってこの時まで継続していたことが分かる。そして『陽明学』創刊号が中洲の師である「山田方谷特集」であるのは、二松学舎における陽明学研究の新たな始まりを示したのであろう。

創刊号へ執筆した研究者には所員である岡田武彦（一九〇八〜二〇〇四）のほか、宋明思想史研究の大家である山下龍二・市川安司両氏がおり、『陽明学』は、洪のいうように、「権威」ある機関誌としてスタートした。

次に、『陽明学』創刊号から最新号である三十二号までの特集・発行年を掲げよう。

創刊号	山田方谷特集	平成元年（一九八九）三月刊
二号	中江藤樹特集	平成二年（一九九〇）三月刊
三号	佐藤一斎特集	平成三年（一九九一）三月刊
四号	三島中洲特集	平成四年（一九九二）三月刊
五号	錢徳洪特集	平成五年（一九九三）三月刊
六号	熊澤蕃山特集	平成六年（一九九四）三月刊
七号	吉田松陰特集	平成七年（一九九五）三月刊
八号	山田済斎特集	平成八年（一九九六）三月刊
九号	西郷隆盛特集	平成九年（一九九七）三月刊

十号	王龍溪特集	平成十年（一九九八）三月刊
十一号	池田草庵特集	平成十一年（一九九九）三月刊
十二号	李卓吾特集	平成十二年（二〇〇〇）三月刊
十三号	東沢瀉特集	平成十三年（二〇〇一）三月刊
十四号	劉念台特集	平成十四年（二〇〇二）三月刊
十五号	林良齋特集	平成十五年（二〇〇三）三月刊
十六号	王心齋特集	平成十六年（二〇〇四）三月刊
十七号	那智惇齋特集	平成十七年（二〇〇五）三月刊
十八号	春日潜庵特集	平成十八年（二〇〇六）三月刊
十九号	朝鮮・韓国陽明学特集	平成十九年（二〇〇七）三月刊
二十号	王陽明特集	平成二十年（二〇〇八）三月刊
二十一号	朱子後学と陽明学特集	平成二十一年（二〇〇九）三月刊
二十二号	唐甄特集	平成二十二年（二〇一〇）三月刊
二十三号	李二曲特集	平成二十三年（二〇一一）三月刊
二十四号	海外における陽明学研究特集	平成二十六年（二〇一四）三月刊
二十五号		平成二十七年（二〇一五）三月刊
二十六号		平成二十八年（二〇一六）三月刊

二十七号

平成二十九年（二〇一七）三月刊

二十八号 三島中洲特集

平成三十年（二〇一八）三月刊

二十九号

平成三十一年（二〇一九）三月刊

三十号 王龍溪研究の現在特集

令和二年（二〇二〇）三月刊

三十一号

令和三年（二〇二二）三月刊

三十二号 陽明後学研究の現在

令和四年（二〇二三）三月刊

創刊号を飾るのが山田方谷であるのは、同号の編集後記に「二松学舎の創立者三島中洲先生の師であり、二松学舎と最も縁の深い陽明学者で、学問と修養を藩政に生かし、現代的に言えば行政改革と財政再建に立派な功績を残」したからだという。同じく、二号が中江藤樹であるのは、彼が「日本陽明学の開祖」だからだという。三号にこれまた中洲が昌平齋で師事した佐藤一斎を取り上げて、ようやく四号に三島中洲特集が組まれている。中洲の先人達を先に取り上げていることは、『陽明学』という機関誌が日本における陽明学を網羅的に研究していこうという意気込みのあらわれとも考えることができる。

こうして、九号までは日本の陽明学が特集されてきたが、五代所長松川健二（一九三二～二〇一七）の「中国における陽明門下の人々の多彩な思想展開が、その後中国に在って如何なる態様を現出したかという問題は、日本における陽明思想の受容とその吸収・活用の実態の特質解明のために有効な視点であるに相違ない」という考えのもと、十号の『陽明学』以降、「これからは日本と中国の陽明学者を交互に特集すること」となった。⁽⁶⁶⁾そしてこれは彼の定年退職する十四号まで継続された。松川の後には、日中の陽明学者を交互に特集することはなくなっていたが、それでも基本的に毎号特集が組

まれている。

この他陽明学研究所の活動として、輪読会が平成九年（一九九七）四月より始まり、顧憲成（二五五〇～一六二二）の『小心齋劄記』の訳注が『陽明学』十四号から二十三号まで十回にわたって連載され、その巻一が終了した段階で、これを切り替えて全国規模で展開されている『朱子語類』の訳注を開始し、今日まで継続している。

その他「陽明学研究所蔵目録」が『陽明学』一～八号に連載されており、所蔵資料の一部を伺うことができる。しかし、現在までにおける全体的な所蔵目録は存在しておらず、その編集が望まれる。

この他各特集内の論考は、個々の陽明学者を研究する上で非常に有益であり、今後もこのような特集を組み、日本における陽明学研究の中心として今後も活動していくことが期待される。

おわりに

以上、二松学舎と陽明学について、個々の事例を取り上げて通史的に概観してきた。

二松学舎は、創立当初より中等教育を補完する役割を担っていたため、講義において中洲は陽明学を講じることが少なかった。しかし、中洲の息子である復や、山田方谷の義孫である準をはじめ、二松学舎出身者には陽明学者と称すべき人物が少なからず存在している。さらに、「二松学舎の伝統としての陽明学」という認識は、現在も活動を続ける陽明学研究センター創設当初より謳われてきた。

今後、この歴史を更に探究するためには次の四点を特に研究していくべきであろう。

一つ目は、三島中洲の陽明学理解とそれが門人に如何に継承されたのか、いわば学統の確立があったのかどうかということである。

三島復は父である中洲に対して「先考学説の根底にして、その全般を貫通する者理気合一説とす。これ固より陽明氏に本づけるなり」と主張する。中洲自身も、方谷より陽明の学を受けたと述べているが、近年の研究においては、方谷の陽明学に対する中洲の理解は不足していたとされる。⁽⁶⁷⁾ このことを踏まえつつも、二松学舎における陽明学理解の継承関係について、各人の著作を比較してもういちど整理すべきであろう。

明治期の二松学舎における授業に関する研究としては、例えば二松学舎大学に所蔵される在塾者の日記や講義筆記などから具体的に考察した清水信子「明治期における二松学舎の漢学教育―二十年代後半から三十年代を中心として」⁽⁶⁸⁾ などがある。

幸いに、二松学舎大学附属図書館及び東アジア学術総合研究所には、二松学舎で学んだ学生の蔵書がいくつか所蔵されている。しかしながら、その内陽明学に関する書物や、二松学舎における講義筆記や授業で使われた陽明学に関するテキストなどはあまり研究に利用されていない。今後はこれらの所蔵資料を用いて二松学舎における陽明学の講義が如何に行われてきたのかを調査していくことによって新たな発見が得られるだろう。

中洲の門人についても、本稿では山田準と那智佐典を取り上げるにすぎなかったが、その他の門人も中洲の陽明学について回想を残している。また、門人同士でも詩文の結社を結成し、二松学舎卒業後も詩文の交わりを続け、文集が出版される際には序文・跋文を書きおくっている。このような門人同士の横の繋がりにも注目することによって、明治から大正にかけての二松学舎の学問が如何なるものであったのかが分かる。

二松学舎の学問の在り方が創立から今日まで如何なる形で継続してきたのかを考えることによって、二松学舎が今後守っていく学統を今一度確認することができる。

二つ目は、三島復の博士論文が受理されなかった事について、山田準「三島雷堂君伝」などでは、復はそのことに対して無関心であったと述べているが、今後は、復の思想研究を進めると共に、大学で陽明学を研究することの意義について考察を深める必要があるだろう。

三つ目は、王学会と東敬治の陽明学会との関係についてであるが、宮内黙蔵と東とは活動方針の違いによって仲違いが起こったと考えられるが、一方で準は東との関係も深かった。よって二松学舎内における陽明学の在り方は、中洲や宮内、準など個々の人物の思想や立場を整理しつつこれから更に研究すべきである⁶⁰と考える。

四つ目は、陽明学研究所設立前後の時期における二松学舎大学と台湾との関係である。そもそも二松学舎大学には昭和四十四年四月に設立された東洋学研究所があった。しかしながら、これとは別に陽明学研究所が設置されたということは、研究面以外に、浦野および当時の二松学舎大学が何らかの別の意図を持っていた可能性が高い。

そこで浮かび上がってくるのが当時の台湾との関係である。昭和四十七年九月の日中国交正常化によって日華断交となつたが、二松学舎はこれ以降も台湾との関係が深かったことは、次に掲げるいくつかの客観的事実より裏付けられる。

陽明学研究所が開設される昭和五十三年四月より以前、昭和五十年十月、当時の理事長兼学長であった浦野は、親台湾派として知られる福田起夫を二松学舎維持会長に推戴した⁶¹。

また浦野は同月、当時中国文化大学教授・台湾省合作金庫理事長であった洪樵榕の招待により台湾へ渡航、二十七日中華学術院において「日本に於ける中国学」と題する講演を行い、同院長張其昀（一九〇一―一九八五）より「名誉哲士」

の学位を授与されている（ちなみに後に陽明学研究所員となる岡田武彦も昭和四十七年（民国六十一年）四月に中華学院より「名誉哲士」の学位を授与されている）。また昭和五十二年（民国六十六年）四月には再び渡台し、教育部貴賓室において当時の教育部長蔣彥士（一九二五～一九九八）より文化奨章を授与されるなど、この時期の二松学舎の立場は浦野を中心として、いわば親台湾派であった。

このように台湾との関係が深くなっていった理由の一つに洪の存在がある。^①

洪はかねてより、国民党中央党部常務委員や教育部部長などを務め、中国文化学院を創設した張其昀へ日本文学の重要性を訴えていた。

その結果、昭和四十年（民国五十四年・一九六五）八月に中国文化学院に東方語文学系日文組が設置されると、その教授に就任した。これは戦後、台湾の大学における日本語学科の始まりであるが、さらに洪は張へ訴えかけ、翌昭和四十一年（民国五十五年）同学院に日本研究所が設置された。

その後洪は、昭和五十年（民国六十四年・一九七五）五月二松学舎大学を訪れ、加藤常賢の紹介で浦野と知り合い、二松学舎大学客員教授及び維持会副会長となる。この時洪は維持会副会長として、同会会長である福田とも知り合っている。

同年十月、浦野は中華学院より「名誉哲士」の学位を、翌々に教育部より文化奨章を授与されたことは先述したが、その経緯について洪は次のように述べている。

曉峰さん〈張其昀…引用者注〉は中国文学の方を重視していたため、日本文学に対する理解はそれほどなかった。ちょうど日本にある二松学舎大学は日本文学・中国文学の両方を重んじた伝統ある学校であり、さらに文化大学の資金問題も解決した後であったので、曉峰さんは私の建議を受け入れてくれ、彼に二松学舎の教育内容を紹介し、当時の理

専長兼学長であった浦野匡彦が訪台した際に、曉峰さんへ紹介した。創設者である張氏（張其昀…引用者注）は彼を文化大学に招待しようとし、文化大学も浦野学長の講演の後、すぐに「榮譽博士」の学位を彼に授与した。同時に、私の方も彼を連れて教育部を表敬訪問し、当時の教育部長蔣彥士の歓待によって、併せて文化獎章を彼に授与することとなった。⁷²

これによれば洪と浦野を仲立ちとして、中国文化学院および中華民国教育部と、二松学舎大学との関係ができたことが伺える。この時浦野は張に対して、日本文学と中国文学いずれも学ぶことの重要性を伝えたであろう。ちなみに時代は下つて、平成十二年（民国八十九年・二〇〇〇）二松学舎大学と中国文化大学とは協定校となっているが、この締結に関しても洪の働きが大きかった。

この他洪は、浦野が台湾より二度受賞された時期、すなわち昭和五十一年（民国六十五年）十月十日、二松学舎創立九十九周年記念式典において「心の故郷二松学舎」と題する講演を行っている。このような一連の流れの中で洪は二松学舎大学との関係を深めていった。

洪はその後、昭和五十四年（民国六十八年・一九七九）九月に来日し、十月より二松学舎大学教授兼図書館副館長に就任、平成七年（民国八十四年・一九九五）三月同大学教授退職、翌四月名誉教授となっている。五月には台湾へ帰り、当時の中国文化大学東方語文学系日文組主任徐興慶氏の招聘により、再び同大学教授となっている。洪が陽明学研究所の発展に果たした役割は評価されてしかるべきであろう。

当時の台湾における陽明学研究も活発で、中国文化学院内に設けられた中華学院からは昭和四十七年（民国六十一年）二月に、王陽明生誕五百年を記念して『陽明学論文集』が刊行され、その「序言」において張其昀は陽明学研究的必要性

を宣伝している⁽²³⁾。そもそも、中国文化学院が設けられたのは台北市士林区の陽明山であるが、「陽明山」という名称も元「草山」であったのを、昭和二十五年（民国三十九年・一九五〇）三月陽明学を好む蒋介石⁽²⁴⁾が改称したものである。これらのことなどからも、同学院の立場を伺うことができる。

当時の中国大陸における陽明学研究の状況については先述したが、同時期の二松学舎大学と台湾、特に文化大学との関係は陽明学研究所の開設と関係があるのか、また現在では台湾との関係は当時と比べて確実に希薄となっているが、開設後の二松学舎大学の立場は如何に変化していったのか。これは人事なども大きく関わっていると考えられるが、今後諸々の資料を収集、解読してこれを明らかにする必要がある。これによって、戦後日本の中国学の辿った道筋の一例を示すことができよう。

戦後七十年を経た今日では、昭和から平成にかけての中国学者も研究範囲に含まれ、近年多くの報告がなされている。その中で一四五年の歴史を持つ二松学舎における中国学の歴史も研究されるべき対象であると筆者は考える。

「二松学舎と陽明学」という大々的な題目を掲げてその歴史を概観してきたが、今後は二松学舎の歴史、あるいは近代日本と陽明学とを考える上でも、特に以上の四点に特に注目して研究を進展させていくべきであろう。

注

- (1) 浦野匡彦「活学の徒の養成をめざして」(二松学舎百年史編集委員会編『二松学舎百年史』二松学舎、一九七七)
- (2) 「事上磨鍊」は、『伝習録』巻上「陸澄録」に「人須在事上磨。(人須らく事上に在りて磨すべし。)、また巻下「陳九川所録」に「人須在事上磨鍊、做工夫、乃有益。(人は須く事上に在りて磨鍊し、功夫を做すべく、乃ち益有り。)」とあるのに由来する。
- (3) 浦野には二松学舎在学中に執筆した「事上磨鍊論」(二松学舎専門学校松友会『二松』七号、一九三一)という論文がある。なお、浦野の経歴については、浦野匡彦著、二松学舎松苓会編『浦野匡彦言論集』二松学舎松苓会、一九八七・菅根順之『浦野匡彦伝』

- 二松学舎松苓会、一九九〇・西片恭子『上毛かるたのころー浦野匡彦の半生』群馬文化協会、二〇〇二・岡野康幸編『浦野匡彦 伝』上毛かるた生みの親の生涯』みやま文庫、二〇一八を参照。
- (4) 例えば単著として、小島毅『近代日本の陽明学』講談社、二〇〇六・荻生茂博『近代・アジア・陽明学』ペリかん社、二〇〇八・山村奨『近代日本と変容する陽明学』法政大学出版社、二〇一九などがある。
- (5) 三島毅『陽明四句訣の略解』(『中洲講話』文華堂書店、一九〇九) 参照。中洲における道德涵養と陽明学についてはすでに町泉寿郎『幕末明治期における学術・教学の形成と漢学』(二松学舎大学東アジア学術総合研究所日本漢文教育研究推進室『日本漢文学研究』十一号、二〇一六)・同『二松学舎の漢学教育』(江藤茂博・町泉寿郎編講座近代日本と漢学第2巻『漢学と漢学塾』二松学舎、二〇二〇)に言及がある。
- (6) 『王学入記録簿』(二松学舎大学附属図書館三島文庫所蔵、写本)。なお引用にあたっては表記を印刷用字体・平仮名に統一し、句読点を適宜付した。
- (7) 三島毅『余の学歴』(同注(5))『中洲講話』
- (8) 『漢学大意』(二松学舎編『二松学舎舎則』二松学舎、一八七九)
- (9) 同注(5) 町氏二〇二〇論文
- (10) 松井庫之助『二松学舎創立記念懷旧談』(国分三亥編『二松学舎六十年史要』二松学舎、一九三七)
- (11) 山田準『松門懷旧雜記』(同注(10)) 書
- (12) 三島毅『学庸講義』(二松学舎編『漢文学講義録』、二松学舎大学 SRF 所蔵加藤復斎旧蔵資料)
- (13) 前掲注(5)
- (14) 三島毅著、久保範校『大学私録・中庸私録』(二松学舎大学附属図書館所蔵)
- (15) 三島中洲の『私録』類に関しては、石川梅次郎『三島中洲先生の私録』(二松学舎大学編『創立百周年記念二松学舎大学論集中国文学編』二松学舎大学、一九七七) 参照。
- (16) 三島復『自序』(『哲人山田方谷―附陽明学講話』文華堂書店、一九一〇)。なお、同文から『哲人山田方谷―附陽明学講話』が、復の博士論文に基づき、『添補改訂』したものであることが分かる。
- (17) 引用は、永山卯三郎編『倉敷市史』第十冊(名著出版、一九七四)所収、昭和四年二月二十四日に行われた復の追悼会での山田準の談話『三島雷堂先生追悼会筆記』による。
- (18) 山田準『三島雷堂君伝』(三島復『王陽明の哲学』大岡山書店、一九三四)

- (19) 濱久雄「三島雷堂の学問と思想―陸王哲学研究を中心として」(『二松学舎創立百二十周年記念陽明学論叢』学校法人二松学舎、一九九七)では「三島雷堂が東京帝国大学大学院在学中に研究した『陸王哲学』が十余年間も放置され、市村器堂のもとに眠っていた事実には驚かざるを得ないが、博士論文として評価するには躊躇せざるを得なかつた事情があつたのかもしれない。とにかく該書は円熟した学者の研究書ではなく、三〇代の新進気鋭の学者の労作であつたためかも知れない」と意見を述べている。
- (20) 山田準「例言」(同注(18)書)
- (21) 三島復「例言」『陸象山の哲学』東京宝文館、一九二六)
- (22) 山田準「例言」(同注(18)書)のほか、昭和八年撰文の山田準「王陽明哲学序」(同注(18)書)には「昨歳偶由井上博士之言、獲之市村博士之処。(昨歳偶たま井上博士の言に由り、之を市村博士の処に獲。)」とあり、博士論文発見には井上の発言も関係していたことが分かる。
- (23) 前掲注(19)濱氏論文がほとんど唯一のもので、この他山下龍二「日本の陽明学」(陽明学大系第1巻『陽明学入門』明德出版社、一九七一)でも少しく触れられている。
- (24) 前掲注(23)山下氏概説
- (25) 明治期の大学における陽明学研究の在り方を考える手掛かりとして、例えば、大学院在学中に『日本之陽明学』(鉄華書院、一八九八)を刊行した高瀬武次郎の博士論文の題目は「先秦諸子哲学」(明治三十八年十一月文学博士授与)であつたことが挙げられる。
- (26) 王学会の活動記録についての先行研究として、吉田公平「宮内黙蔵年譜稿」(東洋大学東洋学研究所『東洋学研究』四十五号、二〇〇八)では、高瀬武次郎「序」(山田準『陽明学精義』三友社書店、一九三三)、『二松学友会誌』や宮内黙蔵の「自叙伝」(『癸亥大詔通釈』松雲堂、一九二五)より王学会に関する記事を引用している。
- (27) これらの雑誌に掲載される二松学舎関係人物の論文題目や活動記録に関しては、吉田公平「二松学舎の陽明学―山田方谷・三島中洲・三島雷堂・山田準」(二松学舎東アジア学術総合研究所陽明学研究部『陽明学』十七号、二〇〇五)参照。
- (28) 高瀬武次郎「序」(同注(26)『陽明学精義』)
- (29) 町泉寿郎・鈴置拓也「王学会記録簿」の解題と翻印」(二松学舎大学東アジア学術総合研究所『二松学舎大学東アジア学術総合研究所集刊』四十九集、二〇一九)。引用にあつては句読点を適宜補つた。
- (30) 創立後、規約が度々変更されたことは、「王学会記録簿」中に確認でき、また「彙報・宮内黙造」(二松学友会『二松学友会誌』十六号、一九〇五)にも規約全九条が記されており、内容が少々改められていることが分かる。
- (31) 東敬治と明善学社・陽明学会については、岡田武彦「総論」・「解説」(岡田武彦監修『王学雑誌』文言社、一九九二)・吉田公平「東

正堂年譜初稿」(東洋大学中国学会『白山中国学』十一号、二〇〇四)・同「東敬治と『王学雑誌』について」(東洋大学文学部中国哲学文学科『東洋大学文学部中国哲学文学科紀要』十六号、二〇〇八)ほか、町泉寿郎「東敬治書翰(山田準宛て)」にみる陽明学会の活動」(二松学舎大学東アジア学術総合研究所陽明学研究会『陽明学』二十号、二〇〇八)を参照。

(32) 『彙報・会員及同窓消息・宮内點蔵』(松友会『二松学友会誌』二十四号、一九〇九)

(33) 同注(26) 「宮内黙蔵年譜稿」。出典は、宮内黙蔵『癸亥大詔通釈』(松雲堂、一九二五)所収の「自叙伝」明治四十二年条に「先是、同学某某同志、別興称陽明学会者、請合王学会于同会。余辞其請、以王学会暫移之二松学舎、委於三島復氏管掌。(是より先、同学某同志を募り、別に陽明学会と称する者を興し、王学会を同会に合するを請ふ。余其の請ひを辞し、王学会を以て暫く之を二松学舎に移し、三島復氏の管掌に委す。)」とあるのによる。原文中の「同学某」は東敬治を指す。なお「宮内黙蔵年譜稿」で「大正六年まで東敬治と絶交」とあるのは、「自叙伝」大正六年(一九一七)条に「四月、東正堂行朱舜水祭典会于其宅。応其請、往講演焉。余与正堂、温容不相接者殆十年矣。道固同、亦何築溝渠于其間乎。清酌罄歡而還。(四月、東正堂行朱舜水祭典会を其の宅に行ふ。其の請ひに応じ、往きて講演す。余と正堂と、温容相ひ接せざる者殆ど十年なり。道固より同じ、亦た何ぞ溝渠を其間に築かんや。清酌罄歡して還る。)」とあるのによる。

(34) 同注(32)

(35) 宮内黙蔵「新年の所感」(明善学社『王学雑誌』一卷十二号、一九〇七)

(36) 山田琢纂「山田済斎君年譜略」(筆者複写版架蔵、写本)

(37) 山田準と東敬治の陽明学会との関係については前掲注(31)町氏論文を参照。

(38) 二松学舎大学附属図書館には、昭和二年一月五日山田準宛山口九十郎書簡(フアイル29-779)が所蔵されており、そこには山口が上京直後の準に対して、面会の日程調整を依頼する旨が記されている。おそらくはこの時期に王学会開催の話し合いが行われたのであろう。

(39) 漢詩の訓読は筆者による。

(40) 「伝統と権威をほこる二松学舎大学」(二松学舎大学『二松学舎大学新聞』八十一号、一九五八)

(41) 那智左典「開菁菁学舎序」(『惇斎文詩稿』浦野匡彦、一九六一)。なお菁菁学舎の経営に関しては、奈良方直「那智左伝 神と儒のはざままで」(21世紀COEプログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」『三島中洲研究』一号、二〇〇六)・同「漢学塾「菁菁学舎」の閉鎖理由再検討から布施倪斎・欽吾父子へ」(近世近代漢文班・三島中洲研究会編『二松学舎と日本近代の漢学』二松学舎大学21世紀COEプログラム事務局、二〇〇九)・神立春樹「那智左伝師の漢学塾菁菁学舎、そして無逸塾―千葉県域にみる明治期

- の地方漢学塾・私立諸学校」(21世紀COEプログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」『三島中洲研究』二号、二〇〇七)を参照。
- (42) 那智佐典「就任の辞」(同注(1)書)
- (43) 濱久雄「那智惺斎の学問と思想」(二松学舎大学東アジア学術総合研究所陽明学研究所『陽明学』十七号、二〇〇五)
- (44) 那智佐典「数学半説」(同注(41)書)
- (45) 浦野匡彦「滿支に於ける陽明学の現状」(木村秀吉編『渡邊翁追悼陽明学研究所』渡邊翁追悼陽明学研究所刊行会、一九三八)
- (46) 浦野の中国留学に関しては、岡野康幸「浦野匡彦と中国留学そして二松学舎」(同注(41))、『二松学舎と日本近代の漢学』、同注(3) 同氏編『浦野匡彦伝』第三章「留學生生活」が詳しい。
- (47) 浦野匡彦「創立百周年を迎えて―東洋学確立への理想」(二松学舎松苓会編『浦野匡彦言論集』二松学舎松苓会、一九八七)
- (48) 三島由紀夫の陽明学理解に関しては前掲注(4) 小島氏書において論じられている。
- (49) 同注四七
- (50) 山下龍二「陽明学研究はどう進められてきたか」(『陽明学の研究・上・成立篇』現代情報社、一九七一)
- (51) 銭明「当代中国の陽明学研究」(九州大学中国哲学研究会『中国哲学論集』十三号、一九八七) 原文は中国語、翻訳は筆者によるが、その際句読点は適宜改めた。
- (52) 浦野は、文化大革命の終結期である昭和五十一年四月に訪中しており、その後五十九年(一九八四)十一月に「ただ孔孟の教えを否定することはいけない」と文革中の中国で言ったんだ」(浦野匡彦「王陽明の遺跡を訪ねて」(同注(47)書)という発言をしている。
- (53) 「二松学舎大学陽明学研究所」(二松学舎大学『二松学舎大学新聞』一八八号、一九八〇)
- (54) 書簡は二松学舎大学附属図書館所蔵の昭和三年一月九日付山田準宛安岡正篤書簡(ファイル29-778)であり、本文は以下の通り。
 拝復 御書状拝見仕候院生一同不在中の事にて御電話も御親翰も不通大いに失禮仕候先生の御講義は一同楽みにお待申居候事にて最早時間の變更も如何と存候故依然月曜午前と任り十六日より毎月曜五回と致度何卒御都合願上候恐惶
 初九 山田濟齋先生侍曹 安岡正篤
- (55) 浦野匡彦「序」(安岡正篤『陽明学十講』二松学舎大学陽明学研究所、一九八一)
- (56) 小林眞智子編『明德出版社の六十年と小林日出夫の想い出』明德出版社、二〇一三。なお同書によれば、小林日出夫は、その父正篤が安岡正篤のもとで学んでいた関係から、幼少の頃より父と共に金雞学院で安岡の講演を聴いていた。さらに日出夫が昭和二十九年(一九五四)に設立した明德出版社の「明德」という社名も安岡の命名による。

- (57) 中田勝「雑誌『陽明学』調査」(二松学舎大学『二松学舎大学新聞』百九十号、一九八一)
- (58) その内容は、『昭和五十三年度二松学舎大学夏期公開講座陽明学特輯』(二松学舎大学陽明学研究所、一九七九)としてまとめられている。
- (59) 洪樵榕「陽明学研究所の思い出」(二松学舎大学東アジア学術総合研究所陽明学研究部『陽明学』二十一号、二〇〇九)
- (60) 同注(59)
- (61) 洪樵榕「二松学舎大学」(洪樵榕口述、卓遵宏・欧素瑛訪問・欧素瑛記録整理『洪樵榕先生訪談録』国史館、二〇〇一) 原文は中国語、翻訳は筆者によるが、その際、句読点は適宜改めた。(同書に關しては以下同じ)
- (62) 洪樵榕「編集後記」(二松学舎大学陽明学研究所『陽明学』創刊号、一九八九)
- (63) 小池良雄「陽明学」発刊のこぼし(二松学舎大学陽明学研究所『陽明学』創刊号、一九八九)
- (64) 同注(62)
- (65) 洪樵榕「編集後記」(二松学舎大学陽明学研究所『陽明学』二号、一九九〇)
- (66) 松川健二「二松の陽明研と私」(二松学舎大学東アジア学術総合研究所陽明学研究部『陽明学』二十号、二〇〇八)
- (67) 三島復「先考中洲先生の学説に就いて」(松友会『二松』五号、一九三〇)
- (68) 松川健二「三島中洲の儒学」(『山田方谷から三島中洲へ』明德出版社、二〇〇八)
- (69) 清水信子「明治期における二松學舎の漢学教育―二十年代後半から三十年代を中心にして」(二松学舎大学東アジア学術総合研究所日本漢学研究センター『日本漢学研究』十四号、二〇一九)
- (70) 福田が浦野と懇意になった経緯について、昭和五十八年(一九八三)春の叙勲で浦野が勲二等瑞宝章を賜った際の祝辞である、福田起夫「叙勲を機に一層の御発展を」(二松学舎大学『二松学舎大学新聞』二〇二号、一九八三)によれば、昭和二十七年十月の衆議院議員総選挙に群馬三区から無所属で立候補し当選した福田が、その選挙の際、群馬県吾妻郡の名家であった浦野家に援助を受けており、その関係で浦野とも関係を持つようになったという。また、浦野匡彦「一生幸せの日」(同上)によれば、その後、昭和三十年十月学校法人二松学舎理事事となった浦野は、二松学舎の経営立て直しのために奔走することとなったが、その時に交渉をした協和銀行及び住友銀行は福田の紹介によるという。
- (71) 洪の経歴については前掲注(61)書を参照。
- (72) 洪樵榕「文化大学」(同注(61)書)
- (73) 張其昀「序言」(中華学術院編『陽明学論文集』中華学術院、一九七二)

(74) 日本陽明学を含む陽明学と蒋介石との関係については、黄克武「蒋介石与陽明学——以清末調適傳統為背景之分析」(『近代中国的思潮与人物(修訂版)』九州出版社、二〇一六)に詳しい。